横濱支部展覽會を見て

横濱の一市民

十一月十二日、秋晴れのすが〳〵しい朝と、同日の夕方、落陽まぼしく、野毛山の左に沒する頃と、兩度僕は、濱港館へ見に行つた。

僕は横濱土着の人間だが、支部の方々とは知己づきが少い、田中君、高畠君、其丈である、今一人會場で會員らしい婦人の方に挨拶せられて吃驚してしまつたが、何にしろ知つてる人は以上二人か三人だ、謂はゞ知らない人達の畫を見に行つたのだ

筆者は知らないでも、畫題は知らないでも、畫は其丈で愉快なものに相違ない、然し親しい人が畫いたのは尙更面白く思ふのは無理ではなかろう、僕は此展覽會に入つた時、個人としては知らぬが、同一の横濱の住人として何だが懷しさが湧いて、皆面白く拜見した、僕は故鄕としての横濱を絶愛するものだ、

二年程前に、横濱に薫風畫會とか何とか云ふ妙な展覽會を見た。所が其作品が餘り不眞面目なのと、其趣意書の餘り生意氣なので、僕は口惜しくなり、其所にあつた、批評紙に散々惡口を書いて來た事がある。僕は横濱が汚れて居る事も知つて居る實利の巷である事も知つて居る、塵にまみれて居る事も知つて居る、だからと云つて、此横濱を嫌ふ横濱人の氣は私には解らない。

私は此汚れた、きたない、うるさい、横濱が大好きだ、きたないから好きなのではない、横濱は僕の故鄕なのだ、横濱——と云ふと僕は何だか懷しくつてたまらない、横濱——と云つてすら僕は何となく溫さを感じる、僕の愛は我故鄕なる横濱に向いて居るからだ。

横濱には火の車が走せ、金貨が爛れて居る、烟突から吐き出す黑い煙や、づーと走る自働車が立てる白塵に、綠の樹さへ見えない、是等は僕とて好ではない、筇を引いて戰場原の夕闇を賞したこともある、武藏野の末に薄を枕した事もある、不器用な筆で、甲州を畫いた事もある、一高時代で「散步の矢代」と云へば知てる人は知つて居るだらう、此赤裸々な自然を好む僕ではあるが、故鄕に對する愛を今は別にしても、横濱の紅塵萬丈を董風會連程けなし度くない、此俗惡汚穢なる横濱に、山の小島氏を生じ星の井上氏を生し蝶の鷹野氏を生じ、劇の山崎氏を生じ、今また、此熱心にして眞摯なる畫家連を生じたのではないか、僕は横濱の芥に感謝をする者である、山河秀麗の地のみに大詩人、大畫家が生ずると云ふのは皮相の見に過ぎない、漱石の云ふ通り、「世が住みにくゝなつた時詩の國と畫の里が生れるのだ、現在に慊らない印度には未來を望む佛教が生したではないか、形式に捕はれた文明社會に於て自然に歸れの聲は發せられたてはないか、**ラスキン**は、自分の大好きな**ターナー**の畫でさへ**アルプス**山が眺められる窓と交換し度いと云ふたではないか、横濱の塵は横濱の藝術の母である、横濱の烟と火とに驚いて之を罵る奴は、顏の汚れて居るに魂消えて、其口に出る敎訓や其心より出る薫化の如何に高く如何に力強きかを知らない阿

呆だ。

加ふるに横濱は横濱の人々にとりては故郷だ、畫筆を持つ程の情のある人で故郷に對して懷しさと溫かさを感ぜぬ人はよもあるまい、此懷しいと云ふ愛の心、即感情こそ、藝術の生命では無いか、僕の考へは若いかも知れないが、世の中の事はすべて此愛及其裏の憎とに支配されてると信じて居る、理由なるものは其後から此情の說明をして、自己の滿足をする方法に過ぎない、山岳會から異論があるかも知れないが、彼の**ラスキン**――彼が自然をあの樣に慕つたのは、彼の熱烈なる感情の爲めだ若い時**バイロン**を耽讀した、感情――人知れぬ思ひを失ふて、狂せんとした、激烈なる感情が方向を變じたに過ぎない、近くは小島烏水先生、――僕は永年先生の作を疑問を抱きながら讀んで來た、が此十月の日本**アルプス**第二卷を讀んで其疑問は解決された樣に思ふ、此事は僕は別に書き度いゝ思ふから今は止めるが**バイロン**の所謂「余は人を愛する事少きに非ず自然を愛すること多きなり」

I love not man the less, but nature more.

と歌いし「愛」こそ、萬づの根原と信ずるのである、**ラスキン**も烏水先生も、**バイロン**の盲愛を責めた、理性の足らぬを責めた、盲愛は成程駄目である、然し僕は理性と感情とは比較的なものと想ふから、**バイロン**の理性の足らぬを責めるよりも、人並の理件にはおさへる事の出來ぬ程强烈な、感情を憐みつゝ驚嘆する事を止めるわけには行かない、青年の作の何となく心に響けるのも大家連の作の乾燥して居るのも一方には、溢るゝ胸の血があるのと他方には、其血が乾いたか凍つたかして固まつて居るからだ、感情其物の表現が即ち藝術の生命だ。

戸張先生は曾て、「畫は主觀を通じたる客觀だ」と云はれた、然し僕は寧ろ「客觀を通じたる主觀」と云ひ度い、目的とする所は畫者の主觀だ、田中君とも會場で談つたが主觀なる語は餘程調法で今の洋畫界には餘程此語の弊害が有る樣に思ふが、其弊は矯めなければならないけれども其主張は何處までも主張として云はざるを得ぬ、主觀即純なる感情が畫の生命をなし、基礎をなすのだ。

感情は斯くの如く大切だ、愛の赴く所は餘程大切にしなければならない、特に故郷に對する愛は愛情中隨分强いものだ、横濱支部の諸君も横濱をば絶愛せられて居る事だらふ、僕は其感情が溢れて迸つて成した溫い横濱の畫が見度くなつたのだ。

勿論故郷の愛の外に愛はいくらもある、横濱の人で甲州が好きだから甲州を畫くも賛成である、又僕とて勿論國民文學や故郷文學を說きやしない、只横濱を畫くには横濱を最も愛する人が適すと云ふ立脚地から横濱支部の展覽會に、愛横濱の情が結晶した樣な畫が見度かつたのだ、横濱の畫も大部あつた、然し何れも僕には他に良い所もないし、且近傍で便利だからとて畫いたとしか思えなかつた、風景畫家が雨で外出が出來ないからとて仕方なしに畫いた靜物畫は何だかいやだ、靜物が好きで畫がゝれては一輪の花でも一塊の唐瓜でも面白味と意味がある、

横濱の人だから横濱を畵けと云ふのでは勿論ない、又嫌なのに無理に芥溜の畵を書いてくれとも云はない、只横濱に對して有せられる溫い情があるならば其を表はして見せて下さいと云ふに過ぎない。

僕は本當に「濱つ子」だ、荒川市長が來る時皆んなは同氏の能吏な事を喋々したが、僕は「横濱の事を委ねるには横濱生れの人でなくては駄目だ、英語が出來ても交際が巧みでも横濱を愛する情が無くては駄目だ僕が大きくなつたら横濱市長になつてやる、そして我愛する横濱市に盡すんだ、萬能達せずかも知れぬが一心は足りて居る」と熱を吹いた事がある、僕は市長にはなれそうもない、只横濱を愛する市民としての情は常に燃へて居る遂に展覽會にも不平が出たわけである。

田中君の畵、遠藤君の畵、其他一つやさしい靜物畵、皆んな面白かつた、何れ皆樣にも御目にかゝつて御話を承り度いし、又美しい畵も見せて戴き度い、今僕は本郷の片隅みに潜むで書帙裏の人となつて居る、休暇に歸つた時、御親づきにもして頂きませう、私の名前はエキオと云ふ餘り利巧でもない、大して馬鹿でもない、てな奴です、永々と書き立てゝ恐縮に堪えませぬ。

終りに望んで兄等（一人婦人の方が御居でなら失敬）の眞摯な態度を持續して泥の横濱から蓮を咲かせて下さらん事を祈ります、僕の如きは喜んで泥の中の肥料となりませう。

（十一月十九日）

色彩雜感

大和五條　石田正俊

僕はいつもから思つてゐる、「凡そ人の住宅には色彩配合圖の一面位いは是非とも備へてゐなければならぬ」と。

此は或は極論かも知れぬ、然し人！一家を組織すべき人の頭には、是非共色彩といふ事を考へてゐて頂き度と思ふ。

言ひ古るした論かは知らぬが、一家の長たる人、主婦たる人が、此の色彩に趣味を有してゐたとすれば、實にその一家の幸は大なるものである、常に新鮮な、人を飽かしめない色彩によつて多大の慰藉を受ける事が出來やう、かくして養はれた其家族は、向上せる精神によつて、清淨多趣味の生活を味はひ得る事が十分出來る事と思ふ。

着物一枚、帶一筋にも、十分の注意を拂つて、この柄ならばこの帶が適當だらうだとか、此子の顏の色はからだから、リボンはこんなのを選んでやる、といふ具合に主婦たる人、一家の長たる人は、自分の子が可愛いゝならば、十分色彩學を研究してやらなければならない、がそれも兎角怠り勝の人が多く。

『安物のリボン一つ買ふに何を愚圖々々してるんだ』とかの罵聲をもらす、安物だから十分に選擇すべき必要もあるのだ、艶もなく底もない安物に對した時は、此安物で間に合はす丈けの周到なる注意が、尙のこと必要だ、さるをかういつて罵り散らす御本尊こそ憐れむべきものだ、つまりは色彩といふ事には頓着しない人の癖である。